



## 「石の上にも三年」

何事にも忍耐強さが大切であるということや、辛いことでも諦めずに続けることが大事であることを伝えるための常套句に「石の上にも三年」を使う人がいる。

の上にも三年」が生まれたという説があるものの、三年も座り続けたことで石が温まったのかどうかは定かではない。

親から、学校の先生や先輩から、職場の上司から、飽きっぽくて長続きしない態度を「三日坊主」と窘

## 「三年飛ばず鳴かず」

転期に立つ経営の視座⑦

「石の上にも三年座り続ければ温まる」と、一歩踏み込んだ言い方をする人もいる。

縁起物のダルマの置物で知られる達磨大師やインドの高僧などが三年(または九年)もの長い間、悟りを開くための修行として石の上

められ、「石の上にも三年も座り続けられれば温かくなる。努力は必ず報われる」などと、諦めずに続けることの大切さを懇々と説教がましく聞かされたことがある、というほろ苦い経験を持つ人もいる。子ども心に「座り続けて温めたこととはあるの?」と素朴な疑問を発した

## はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。「継業と人材創造塾」主宰。『介護ビジョン』編集委員、介護福祉教育マスター、健康経営アドバイザー。著書に『99の言葉の杖』(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人材創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ! 経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

HP: <http://www.hayakawa-planning.com>

覚えのある人は、「減らず口を叩くな!」と一括されたに違いない。

「石の上にも三年」の本意は、悟りを開くこと。そのために三年という期間を石に座わり続けることに費やしたのである。

春夏秋冬の季節や昼夜の違いによって石の冷たさも大きく異なる。三年も座り続けることの真意を理解しないまま、立て板に水を流すように「最低でも三年は勤めて欲しい」と「三年も勤めれば仕事に慣れる」をセットに、「石の上にも三年」という言葉を巧みに用いながら採用面接の都度、精神論として語り続けてきた人は少なくない。

何を悟ればよいのかという具体論を示すことなく、「三年座り続けられれば温まる」ことを強いるだけで、素朴な疑問を封じ込んでいたとしたら、思考停止の人材を育成していると言わざるを得ない。

## 「茨の中にも三年の辛抱」

「茨の中にも三年の辛抱(どんなに苦しくても、それをじっと辛抱していれば、そのうち状況が変化し、いつかは必ず報われる)」と言う人もいるが、仕事上の忍耐や辛

さに慣れるための「三年も勤めれば仕事に慣れる」と考えているとしたら再考を促したい。

三年勤め続けたものの、期待したほどの働きぶりではないことを苦々しく思つて「鳴かず飛ばず」と苦言する人もいるが、これは中国古典『史記』の「三年飛ばず鳴かず」に由来する故事成語である。

三年間飛びも鳴きもしない鳥は、ひとたび飛ばば大空高く飛び上がり、ひとたび鳴けば人を驚かすという意から、大いに活躍する機会を長い間じっと待っていることを言う。「うだつが上がない」と同じであると理解して公言する人がいたとしたら改めたい。

本年4月1日、労働基準法等の改正が施行されたことから「働き方改革」に注目が集まる。

「石の上にも三年」を精神論から語り続けてきた人は、これまでの働き方に疑問を挟むことを怠ってこなかっただろうか。

「三年飛ばず鳴かず」の介護人材を育むためにも、まずは「石の上にも三年」について「考え、議論する」ことを通し、具体論として見える化・見せる化する仕組みづくりが必要だ。